

重要民俗資料 荒川神社船絵馬及び 白山媛神社船絵馬保存処置

受託研究報告 第 30 号

茂 木 曙

1. はじめに

船絵馬とは、帆船を画いた絵馬のことで、持船の航海安全を祈願し、また無事渡航を感謝して、船主や船頭たちが神社に奉納したものである。近世、日本海航路によって大阪から若狭、越前、越中、越後などを経て、北海道を結ぶ通商の船を北前船と呼んでいるが、その寄港地であった地方の神社には、こうした船絵馬奉納の例が特に多い。

荒川神社（新潟県北蒲原郡中条町）関係の船絵馬86面、白山媛神社（新潟県三島郡寺泊町）関係の52面は、一社に現存している船絵馬の数量の多い点などその代表的な例で、国内における海運の実状を知る資料として甚だ貴重な遺品といえる。

これらは昭和45年7月に夫々国の重要民俗資料に指定されている。当研究所では、この船絵馬の彩色保存処置のための受託研究を、昭和46年度（荒川神社86面）、47年度（白山媛神社52面）の2年度に亘って実施した。荒川神社の船絵馬は、墨書奉納銘によって年代の明らかなもの70面、銘記があるが判読不可能なもの1面、無年記のもの15面から成り、また年記あるものうち、上限は天保8年（1837）、下限は、明治11年（1878）である。

白山媛神社の船絵馬は、奉納年記のあるもの29面、無銘のもの23面から成り、年記あるものの上限は安永3年（1774）、下限は明治22年（1889）である。しかし、銘記のないものについても、木版画を貼装した船体部や背景などに、年記あるものと全く同一のものがあることが確認される。北前船を画いたこれらの絵馬が、筆者名や図様などから、その殆んどは大阪で作ら

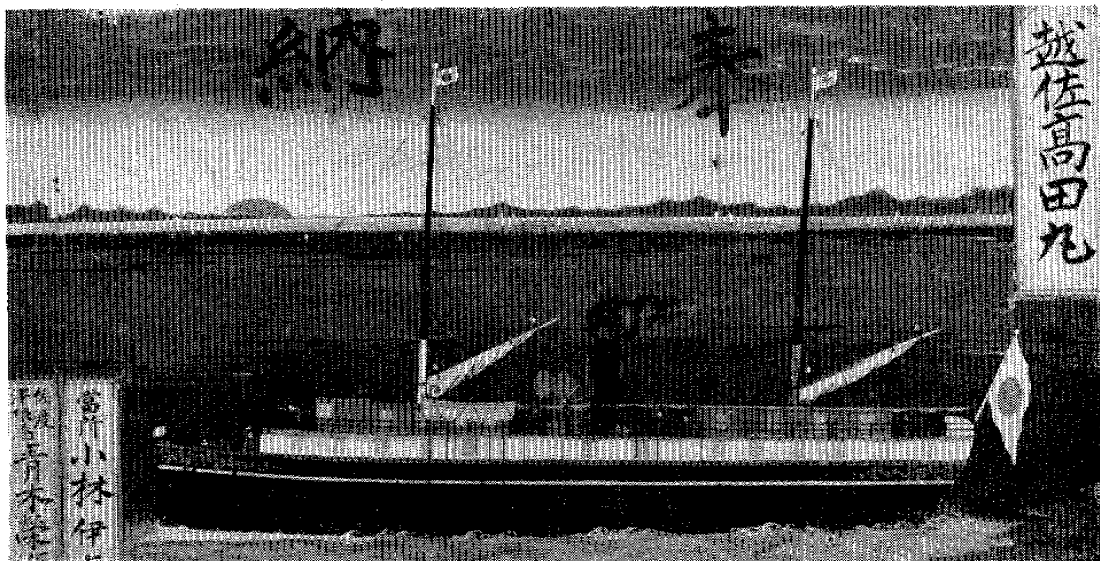


図-1 白山媛神社 No.25

れていることも知られている*。

これらの絵馬に画かれている船は、構造的にもかなり精密に表現されていて、北前船の船体構造や意匠が、年代と共に推移してゆくことがよくわかるのは面白い。

因みに白山媛神社のものの中には、明治15年(1878)に奉納された洋式蒸汽船を描いたものが混じていることも注目されよう(図-1)。

2. 処置前の状態

絵馬の大きさや構造、構図や彩色など、両神社のものには共通点が非常に多い。材は杉の薄板が多く僅かに櫛を用いたものもある。板は通常2枚から3枚を横に並べ、額縁を構成する四囲の細木に釘で打ちつけたような簡単なものが多い。まれには一枚板や、3枚以上というものもある。額縁も幅広の木材を用いて本格的に組んだものもある。

彩色は板の上に直接描いているものは少なく、殆んどは板の一部分、或は全面に和紙を貼りその上に彩色をしている。その和紙による下貼りは、板の接ぎ目や抜け節などに貼られている場合のほかに、和紙に帆の部分や船体部を木版刷りにしたものを輪郭に添って切り抜き、画面の所定の位置に貼ってから、全体を描き整えることも行なわれている。このように簡便な手法によって作られている例が圧倒的に多いが、中にはすべて手描きによったものもある。

両神社の絵馬の著るしい特徴としては、荒川神社では奉納されていた建物内で何らかの煙に燻ぶされて画面が黒ずんでいる例が多く、また、懸ける場所に窮したためか建造物の組材に当たる部分で絵馬の一部を欠きとって納めたものもある(図-2)ことなどである。

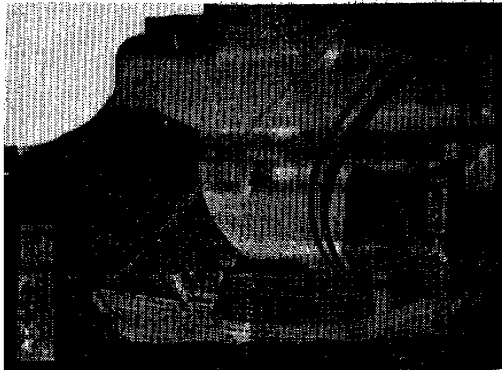


図-2 荒川神社 No. 75

白山媛神社の絵馬は燻害もなく画面は明るい。しかし、よく観察すると、つぎつぎと奉納されてゆく絵馬の中には、上から重ねて画面の中央から、太い犬釘で打ちつけた例もある。そのため下にかくされた絵馬は年代が古いにもかかわらず、新しいものより状態もよく、色彩も鮮明なものがある。板または、和紙の上の彩色下地には、黄土や胡粉がよく使用され、剝離、剝落しているものも多い。また板に直接描かれているものでは、彩色が板の年輪の冬目の硬い部分に沿って剝落している場合もある。総体的に

言えることは、顔料そのものの剝落と共に、下貼りや絵の一部として用いられている版画切抜きの和紙などが、板から剝がれている例も多い。また白山媛神社の絵馬の中には、これらの紙の剝離部分を、種類不明の接着剤で処置してあるものもあった。

3. 保存処置

これらの絵馬の保存処置の特色は、絵の下貼りとして多用されている和紙が、板面から剝離しているものの接着が多かったことである。この接着には、アクリルエマルジョンAC 34が、樋口清治技官(保存科学部化学研究室)から提供された。これを約15%溶液にして筆先を用いたり、注射器を使って、板面と和紙との剝がれに対し塗布したり注入して接着した。

画面には、かなり黄土が使用されているが、その多くは粉化したり層をなして剝離剝落していた。これらのうち顔料層のごく薄い場合には、P. V. A. 2%溶液を筆や刷毛によって塗布したり広い面積の場合には噴霧した。層状で、かなり厚みのある場合の剝がれには、P. V. A. の4

* 「北前船」牧野隆信 柏書房

％液を剝離層の内側に注入し、さらに上から2％液を吹きつけて濾紙で押さえて接着させた。

帆や旗などに使われている胡粉の層の剝離についても、P.V.A. 4％液を使用して処置を行った。

荒川神社の絵馬は、殆んど全面に燻害がおよび黒ずんでいたが、剝落どめ処置を行ない乍ら画面の全般にわたって、彩色層の強化を計るため、P.V.A. 2％液を吹つけまたは刷毛引きし、手速く濾紙で吸いとる作業をくり返えしたが、その結果、画面上の著るしく黒ずんだ汚れが濾紙に吸着してクリーニングすることも出来たのは収穫であった。その際、他の顔料とくらべて群青や、朱の部分はゆるみ易いので特に注意を要した。また一部の茶系および朱の厚手の顔料層にP.V.A.やエマルジョンを使用するとゴム状に軟化して、乾燥と共にそり返えり接着し難くなるものがあったが、その部分には、溶剤タイプのアクリル樹脂10％液を注入して接着した。

また両神社に共通した問題だが、画面全体を紙貼下地としたものに多い例で、板が長年月の間にかなり収縮して、紙が部分的にたるみ、剝離部分を板に接着させると重なりが生じる場合には、破れの部分を貼って剝落を防止し、袋状の剝離はそのままとした。

荒川神社関係の、No. 49には現在の絵の下に別の絵の極く一部が認められたので、石川陸郎技官（物理研究室員）にX線撮影を依頼した。その結果、朝日の輪郭が二重に出たり、帆の反数を表わす線が増加し、別の絵が下に隠れていることが判明した（図-6）。これは書き損じか、再使用された絵馬であろう。

なお、額縁は当研究所での保存処置終了後、それぞれの神社に於て補修施工された。また、作業期間中、当研究所アトリエ内の温湿度は、現地での測定値をもとに、見城敏子技官（物理研究室員）によって、ほぼ温度 15°C、湿度70%を保った。

本研究の実施に当り、西村貞雄（荒川神社関係）、寺山博司（白山媛神社関係）両氏の御協力を得たことを感謝します。

また、この期間中、当アトリエ内で、本絵馬の美術史的な観察調査が当研究所美術部岡畏三郎部長の手で行なわれており、また、和船研究家である石井謙治氏（水産庁海洋漁業部魚船研究室、主任研究官）による実査も行なわれている。夫々の立場からの研究成果は、後刻公表されることと思う。その際両氏から御教示頂いたことも多く、ここに感謝の意を表します。

処置を行なった絵馬

荒川神社

No.	奉納年次	船名	法量 (縦×横) (cm)	No.	奉納年次	船名	法量 (縦×横) (cm)
1	天保八年(1837)		37×52	11	天保十二年	神社丸	64×91
2	天保九年(1838)	観音丸	55×75	12	"	多聞丸	67×86
3	"	"	"	13	"	虎福丸	37×46
4	"	虎福丸?	43×55	14	"	長福丸	36×50
5	天保十年(1839)	宝徳丸	37×52	15	天保十三年(1842)	住吉丸・日吉丸	81×138
6	"	伊勢丸	55×75	16	"	辨天丸	46×61
7	天保十一年(1840)	福市丸	48×62	17	"	永宝丸・不動丸・八幡丸	92×154
8	天保十二年(1841)	観音丸	67×90	18	"	多聞丸	55×74
9	"	宝徳丸	83×108	19	"	八幡丸	53×71
10	"	権現丸	55×74	20	"	福德丸	53×71

No.	奉納年次	船名	法量 (縦×横) (cm)	No.	奉納年次	船名	法量 (縦×横) (cm)
21	天保十四年 (1843)	福市丸・八幡丸・観音丸	93×138	54	文久三年 (1863)	亀齡丸	53×71
22	"	日徳丸	55×74	55	"	神徳丸・辨天丸	66×89
23	"	神徳丸	54×71	56	慶応元年 (1865)	神力丸	52×72
24	"	権現丸	61×91	57	慶応二年 (1866)	神悦丸	52×71
25	"	宝徳丸	35×50	58	明治二年 (1869)	神社丸	59×78
26	天保十五年 (1844)	福祉丸	55×73	59	明治三年 (1870)	"	67×91
27	弘化二年 (1845)	神徳丸	31×41	60	"	扉丸	55×91
28	"	多聞丸	68×81	61	"	観音丸	55×74
29	"	神徳丸	29×38	62	明治五年 (1872)	松国丸	36×49
30	"	八幡丸	55×73	63	"	神応丸	27×38
31	丙午 (弘化三年) (1846)	天□丸	55×73	64	明治八年 (1875)	現祥丸	27×39
32	"	天神丸	54×73	65	"	宝栄丸	77×101
33	弘化三年 (1846)	八幡丸	55×73	66	"	宗栄丸	43×63
34	弘化四年 (1847)	神徳丸	67×91	67	明治十一年 (1878)	得悦丸・神悦丸・永楽丸	78×115
35	"	永幸丸	48×62	68	丁未(弘化四年・1847)	八幡丸	48×63
36	嘉永元年 (1848)	福寿丸	53×71	69	不明	神明丸	54×71
37	"	永宝丸	52×70	70	"	住吉丸	53×72
38	嘉永二年 (1849)	"	54×72	71	"	永幸丸	53×72
39	"	"	53×72	72	"	福寿丸	53×72
40	"	日徳丸	73×97	73	"	八幡丸	54×73
41	嘉永三年 (1850)	幸徳丸・永幸丸	73×97	74	"	福市丸	55×74
42	"	辨天丸	52×71	75	"	荒川丸	55×73
43	"	日徳丸	35×51	76	"	永宝丸	55×75
44	嘉永四年 (1851)	永徳丸	81×104	77	"	福德丸	47×60
45	嘉永五年 (1852)	永宝丸	54×73	78	"	天国丸	54×73
46	"	福德丸	53×71	79	"	不明	36×53
47	"	神社丸	55×72	80	"	神社丸	35×50
48	嘉永六年 (1853)	長福丸	30×37	81	"	星吉丸	40×57
49	"	観音丸	52×72	82	"	安全丸	28×38
50	"	"	52×72	83	"	神社丸	28×30
51	"	永宝丸	54×72	84	"	永幸丸	52×73
52	安政六年 (1859)	明神丸	35×510	85	嘉永元年 (1848)	神明丸	41×57
53	文久元年 (1861)	福市丸・福寿丸・福祉丸	85×131	86	安政三年 (1856)	福市丸	50×36

◎ 国指定は No. 85 まで。No. 86 は指定後に発見され、未指定

白山媛神社

No.	奉納年次	船名	法量 (縦×横) (cm)	No.	奉納年次	船名	法量 (縦×横) (cm)
1	安永三年(1774)	永宝丸	38×55	27	明治十七年(1884)	栄昌丸	57×76
2	安永六酉年(1777)	永福丸	39×54	28	"	"	"
3	天明三卯年(1783)	千蔵丸	69×95	29	明治二十二年(1889)	高砂丸	56×77
4	(裏に) 寛政元年(1789)	時得丸	57×74	30	不明	幸徳丸	54×74
5	寛政元年()	盛得丸	55×75	31	"	照口丸	54×75
6	寛政二年(1790)	長久丸	55×75	32	"	神口丸	49×63
7	文化三年(1806)	永福丸	65×92	33	"	辨財丸	48×65
8	文化六年(1809)	大濟丸	38×51	34	"	大黒丸	36×51
9	文化八未年(1811)	長福丸	47×60	35	"	祐徳丸	52×71
10	文化十一甲戌年 (1814)	幸久丸	67×93	36	"	長福丸	66×91
11	文政十二己口(1829)	長福丸	65×92	37	"	長福丸	56×74
12	"	量徳丸	41×57	38	"	永福丸	48×63
13	文政十三年(1830)	長福丸	47×71	39	"	幸久丸	51×60
14	天保二年(1831)	幸丸	52×69	40	"	天神丸	66×94
15	天保五年(1834)	松葉丸	67×92	41	"	久福丸	68×93
16	天保十三壬寅年 (1842)	都丸	53×71	42	"	"	66×92
17	"	神明丸	37×51	43	"	長宝丸	48×61
18	嘉永二年(1849)	幸徳丸	52×71	44	"	"	84×94
19	嘉永七寅年(1854)	高運丸	26×36	45	"	泰盛丸	82×107
20	文久二年(1862)	司丸	72×97	46	"	幸丸	55×73
21	"	"	"	47	"	"	52×71
22	慶応元丑年(1865)	永福丸	27×37	48	"	永徳丸	48×61
23	"	三星丸	35×48	49	"	長口丸	47×63
24	明治十三辰年(1880)	高砂丸	61×81	50	"	幸全丸	53×74
25	明治十五年(1882)	越佐高田丸	73×127	51	"	天運丸	22×28
26	"	開運丸	58×77	52	"	神力丸	29×39

Akira MOGI : Preservative Treatment of the "FuNA-EMA" (Votive Tablets of Boats),
Important Folkloristic Materials, at Arakawa Shrine and Hakusanhime Shrine

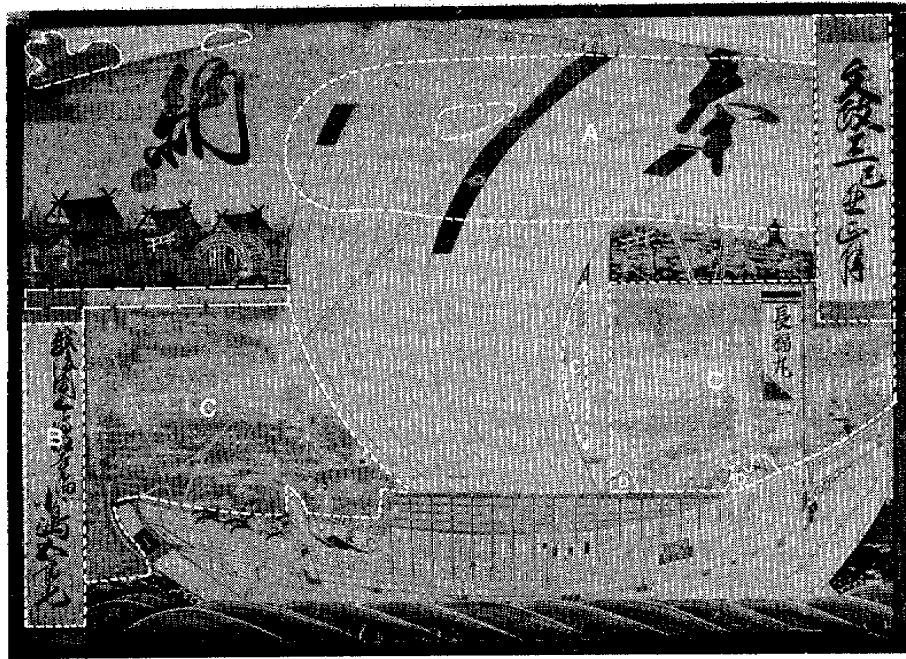
Many Shrines near the ports at which Kitamae-sen boats used to touch, which were active in the Sea of Japan just before modern times, keep votive tablets of boats which were offered by ship owners and sailors. Among these votive tablets, those kept at Arakawa shrine and Hakusanhime shrine both in Nigata prefecture are typical in that each keeps a lot of such votive tablets. We can learn the structure and design of Kitamae-sen boats from them.

We engaged to carry out a preservative treatment for the paintings of 85 votive tablets at Arakawa shrine and of 52 votive tablets at Hakusanhime shrine during the period from 1971 to 1972.

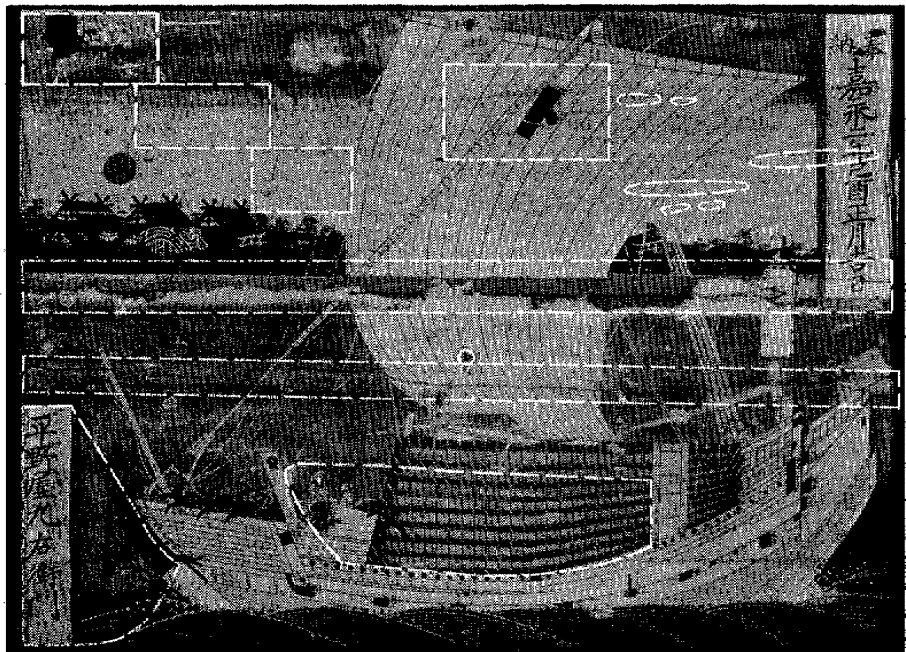
Of these votive tablets, those which the date of offering can be determined by the signatures on them were offered during the period from the 8th year of Tempō (1837) to the 11th year of Meiji (1878) at Arakawa shrine and during the period from the 3rd year of An-ei (1774) to the 22nd year of Meiji (1889) at Hakusanhime shrine. These votive tablets are similar in structure and color. Many of them were made in Osaka. They were mostly made of wooden board. The surface was partly or entirely covered by paper. The paper was painted after being attached. Much of the paint and paper are turning up or exfoliating. Also, almost all the votive tablets at Arakawa shrine are darkened with soot due presumably to some of the shrine customs.

We have carried out treatment for preventing exfoliation of these paintings as follows:

Peeled sheets of paper have been fixed to the wooden boards by application or injection of an about 15% solution of acrylic resin emulsion (Primer AC 34) diluted with water. The treatment for preventing the exfoliation of paintings has been carried out using a 2~4% aqueous solution of P. V. A. or a 10% solution of acrylic resin in solvent.



図一3 部分的紙貼り下地多く剥離もある。紙の接着にはプライマル AC34 の15%液
 顔料の接着には PVA 3%液を使用した
 A……板の年輪の冬目に添って剥離していた。 B……胡粉の浮上りの多かった部分
 C……白群の細かい剥離部分 D……人物像剥離部分
 白山媛神社 No. 11



図一4 全体にかなり厚手の紙下地が使われ、剥離多く、板も粗悪で反りがひどい。彩色も、かなり荒れていたが薄手なので、全体に PVA 3%で処置。
 板の収縮のため紙のたるみもあったが、紙の剥離部分と AC 34の15%液を注射し、もみ
 広げて散らし、濾紙を当て、板に接着させた。
 白山媛神社 No. 18

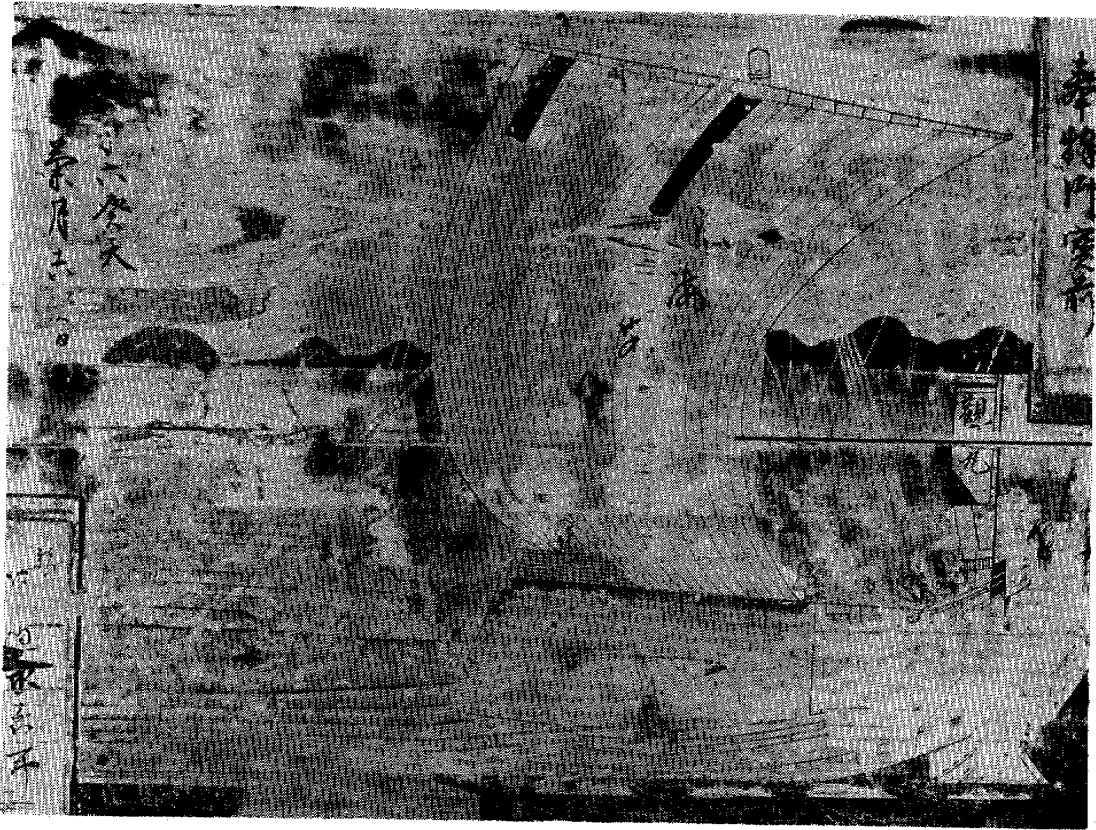
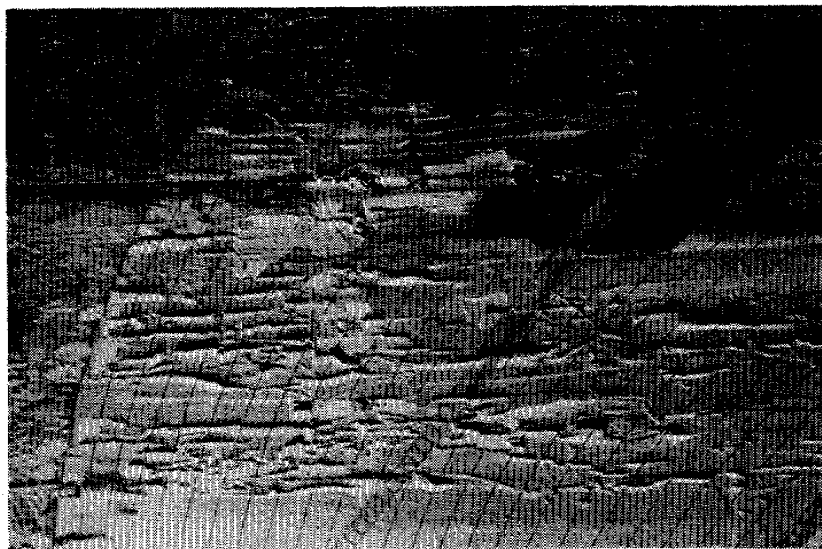


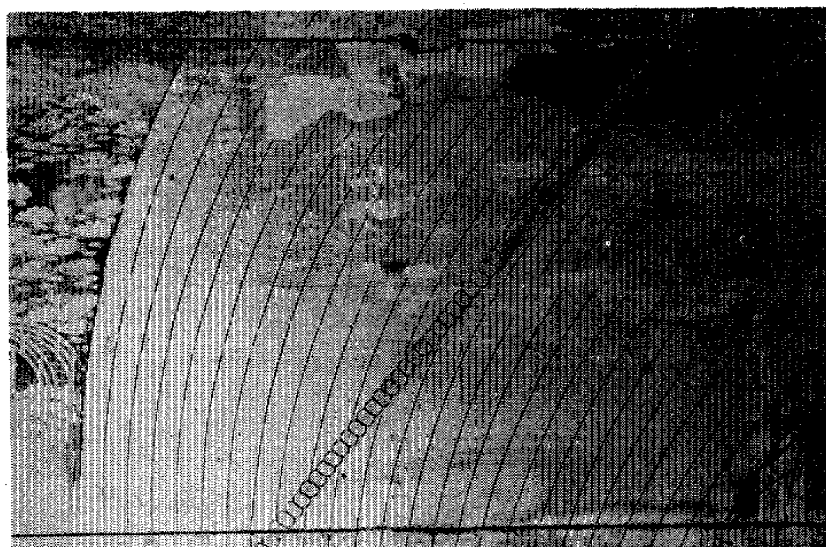
図-5 白山媛神社 No.49



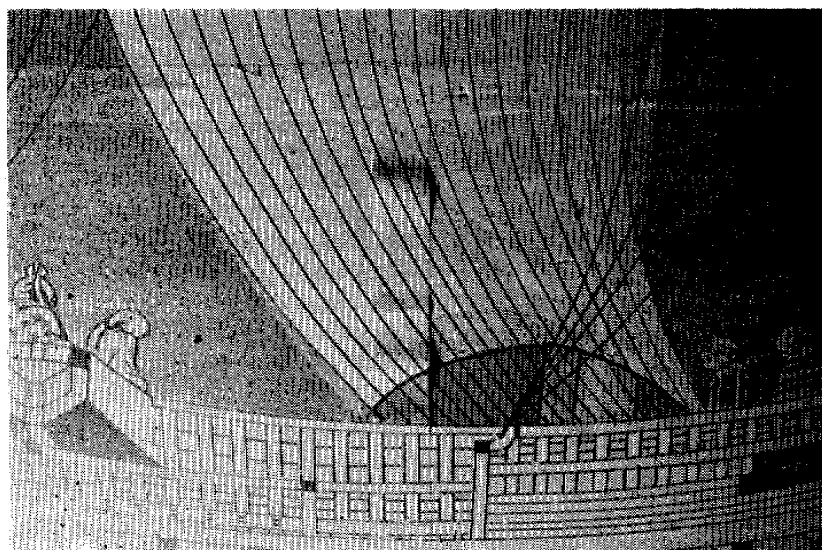
図-6 白山媛神社 No.49 X線写真・太陽が二重に出ている。
帆の反数を現わす線が増えている (石川技官提供)



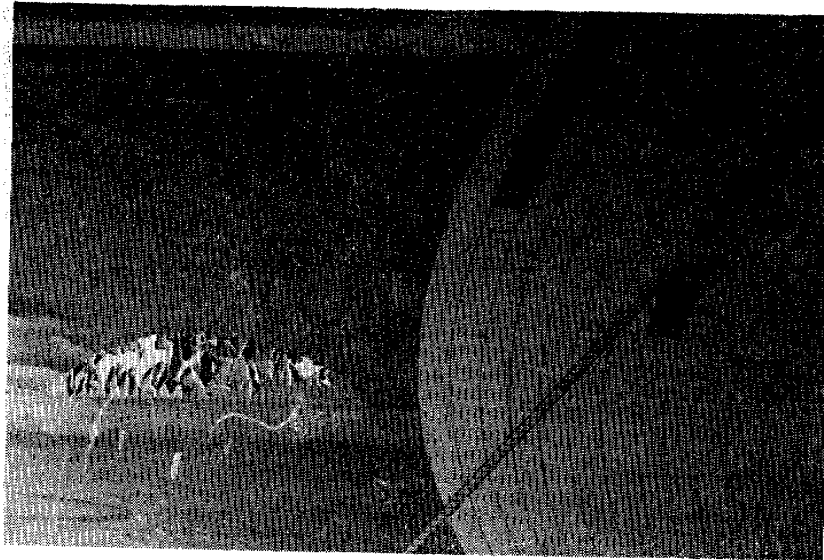
図一7 白山媛神社 No.45 処置前



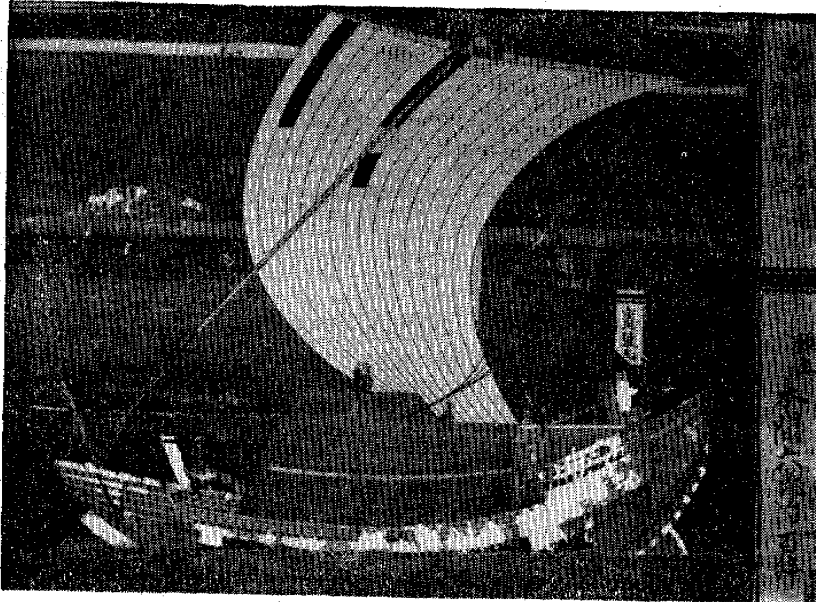
図一8 白山媛神社 No.45 処置後



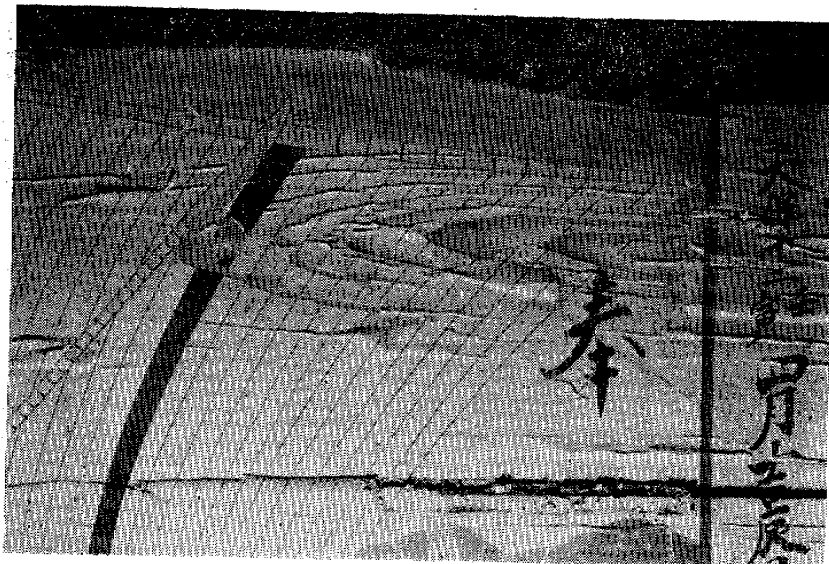
図一9. 白山媛神社 No.35 剥離の一例



図一10 荒川神社 No.65 剝離の一例 処置前(部分)



図一11 荒川神社 No.65 処置後



図一12 白山媛神社 No.16 年輪に沿った剝離, 処置前

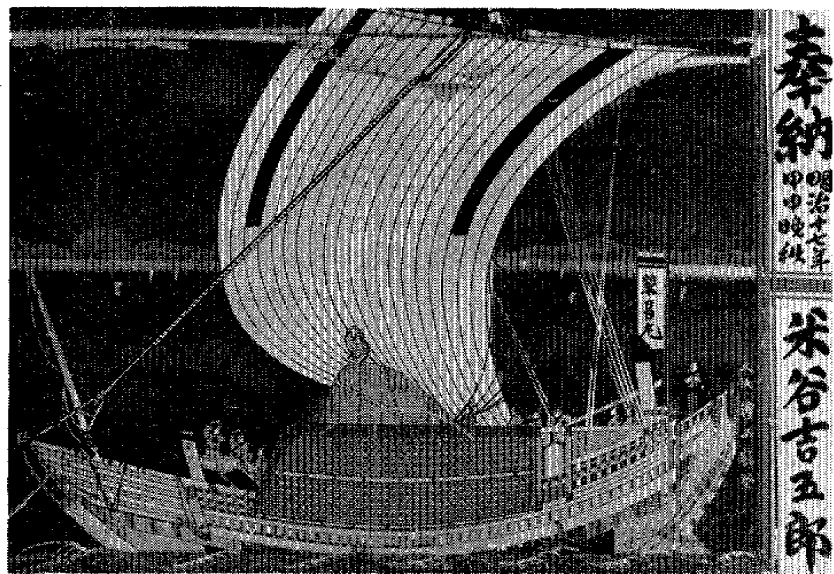


図-13 白山媛神社 No.27 処置後

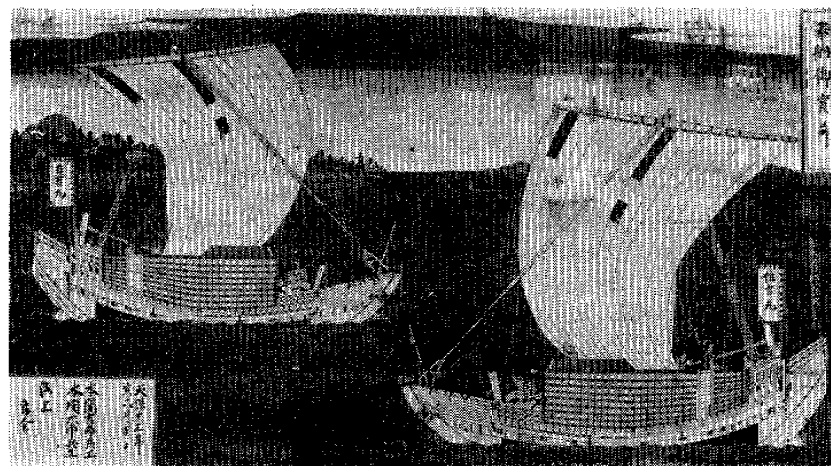


図-14 荒川神社 No.15 処置後

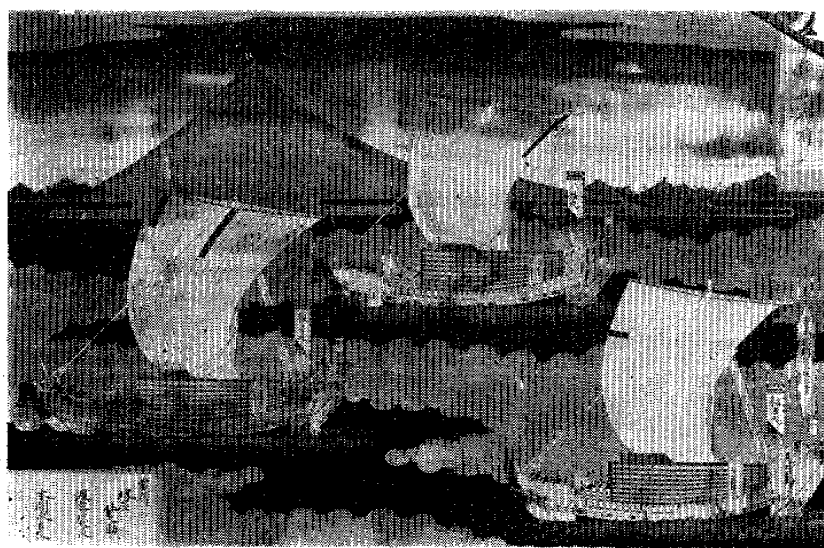


図-15 荒川神社 No.21 処置後